

World Confederation for Physical Therapy (WCPT) は 1951 年に 11 개국で設立され、現在、世界 101 개국 30 万人以上の理学療法士が加盟する国際組織になっている。日本理学療法士協会は 1974 年に正式加盟が承認され、1999 年には第 13 回 WCPT 学会のホスト国となったことは記憶に新しい。2007 年 6 月にはカナダのバンクーバーで第 15 回 WCPT 学会と第 16 回総会が開催され、日本からも多くの理学療法士が参加した。しかし、使用言語が英語ということもあり、WCPT の詳細な活動については日本の理学療法士に十分理解されているとは言い難い。そこで本特集では、WCPT についての理解を深めるため、現在の WCPT のミッションや目的、主要な取り組みや、WCPT が承認する 7 つのサブグループにおける世界のトピックスについてまとめた。

■世界理学療法連盟 (WCPT) —最近の動向 (高橋哲也論文)

WCPT 設立からの歴史的発展、WCPT の現在の目的や使命、戦略的方向性や 2007 年から 2011 年の優先課題について紹介した。WCPT のなかでも日本の会員数の増加は顕著である一方、特に教育と臨床実践における世界との格差も認められる。WCPT はこれまでも自律性、生涯学習、科学的根拠、倫理問題など幅広く議論し進化を遂げており、わが国の理学療法に向かうべき方向においても大いに参考になるものと思われる。

■ WCPT のメインプロジェクト

1. Evidence Based Practice (EBP) (赤坂清和論文)

WCPT における Evidence Based Practice (EBP) における考え方として、科学的根拠の合成、科学的根拠へのアクセス、科学的根拠の実行の観点でまとめられた指針を紹介した。さらに、2007 年の第 15 回 WCPT 学会における EBP に関する興味深い話題として、学術雑誌などにおける structured abstracts を推奨する動きと、オランダ、イスラエルなどで実施されている電子カルテを活用した大規模データベースについて紹介した。

2. Community Based Rehabilitation (CBR) (渡邊雅行論文)

Community Based Rehabilitation (CBR) は、保健医療システムや福祉制度が未整備である開発途上国において推進されてきた。しかし、先進国においても CBR の理念に学ぶところは少なくない。WCPT は、近年、CBR についての見解や基本方針を公表した。本稿では、ネパールにおける CBR の実践を紹介しながら、WCPT が示した CBR の新しい方向性について論じる。

3. International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF) (古西 勇論文)

まず、ICF に関して 2006 年と 2007 年に電子出版された 2 編の WCPT keynotes を素材に、その特徴や活用事例について解説した。次に、WCPT のウェブ上の討論フォーラムなど、ネットワーク化に関する ICF の話題を概観した。また、2007 年の第 15 回 WCPT 学会における ICF 関連演題のテーマを分類し、理学療法士による ICF の最大活用という WCPT が目指す目標を確認した。

■ WCPT のサブグループと日本の理学療法の展望

1. IAAPT と日本の理学療法の展望 (鈴木俊明, 他論文)

IAAPT は鍼灸治療に関与する理学療法士の国際的ネットワークを目指し、WCPT のサブグループとして設立された。IAAPT の活動の目的は、理学療法における鍼灸の応用を促進すること、鍼灸治療の高度なエビデンスを確立すること、鍼灸医学での学問的研究と臨床的研究の融合を促進すること、各国での鍼灸治療方法の確立を援助することなどであり、これらの活動を通して WCPT の他のサブグループとの連携や協力を行っている。日本において、理学療法に鍼灸治療が応用されているとは言い難いが、筆者らが行っている経穴刺激理学療法のように、鍼灸治療の概念・効果を理学療法に活用できる可能性は今後さらに高まるものと考えられる。

2. IFOMT と日本の理学療法の展望 (砂川 勇論文)

紀元前から行われていたと推測される徒手療法是、長い時代を越えて世界のあらゆる地域で民間療法として、発展や衰退を繰り返してきた。20 世紀に入り、医師や理学療法士が用いるようになり、医療としての市民権を得るようになった。本稿では IFOMT の紹介とともに、日本における徒手療法の今後の展望について述べる。今後、徒手療法是、高額な医療機器や広い治療場所も必要としないことから、益々発展することと期待している。また、利用方法も健康の維持・管理や予防にも応用できる

ことから有用であると考えている。

3. IFSP と日本の理学療法の展望（浦辺幸夫論文）

IFSP は WCPT のサブグループである。2007 年の第 15 回 WCPT 学会の期間中に IFSP のミーティングが行われ、スポーツ理学療法やスポーツ理学療法士について話し合われた。IFSP では SPA project を展開し、Audit Tool Kit によって、各国でスポーツ理学療法士の養成プログラムを推進している。日本理学療法協会は IFSP に正式メンバーを送っていないが、今後専門理学療法士制度の進展とともに、世界標準に十分に対応できるスポーツ理学療法がわが国にも定着することを期待したい。

4. IPTOP と日本の理学療法の展望（進藤伸一論文）

IPTOP の加盟組織は現在 18 か国、登録会員数は約 8,000 名で、会報発行や学会開催などを行っている。また、各国の加盟組織も機関誌発行など独自の活動を行っている。世界では、高齢者理学療法は理学療法の専門分野の 1 つとして位置づけられているのである。日本の理学療法の専門性を発展させていく上で、高齢者理学療法分野の国内組織を立ち上げ、IPTOP に加盟することは有益であろう。

とびらページの書道作品について

「春日遅々」（しゅんじつちち）

解説：春の 1 日はゆっくりと過ぎて行く（詩教）